AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム（2009.03）９巻１号:73～75.

平成19年度「独創性のある生命科学研究」プロジェクト課題
精神保健看護学実習での「対象の理解」についての学び
―A大学看護学科4年生の実習終了後のレポートから―

沖野公子, 石川千恵, 内山寛美

旭川医科大学研究フォーラム 9(1) ：45～78, 2008

18) 精神保健看護学実習での「対象の理解」についての学び
ーA大学看護学科4年生の実習終了後のレポートからー

研究代表者　沖野　公子
石川　千恵
内山　寛美

[研究成果の概要]

1）研究背景と目的

精神保健看護学実習（以下、実習）における学生の学びに関する研究はこれまでにもいくつか行われている。コミュニケーションに焦点を当て分析したもの[1)]や、学生の記録物からの学びを内容分析したもの[2)]等がある。しかし、学生が対象をどのように理解したかについての研究は少ない。今回は学生が実習で対象をどのように理解し何を学んだと感じているのかを明らかにする事を目的に研究を行った。

2）研究方法

A大学看護学科の４年生で平成19年５月～９月に実習を終了した60名の学生に、研究の趣旨説明と協力を依頼した。対象となる「２週間の実習での学び」のレポートは、実習課題のため記名式であるが、協力しなくても成績には関与しないことや個人が特定されないようにプライバシーの配慮を充分に行うこと、研究目的以外には使用しないこと等を説明し、承諾を得た（印刷の読みとれた59名のレポートを対象とした）。質的帰納法的研究であり、自由記載のレポート内容を詳細に判読し、「対象の理解」として読み取れる文脈を抽出してデータとし、データの意味する事をコードとして捉えた。類似するコードをサブカテゴリー化し、さらに、意味の類似するサブカテゴリーをカテゴリーとしてまとめ名称をつけた。分析過程において、精神看護学領域での質的研究に習熟した研究者に指導を受け、精神科の臨床経験が７年以上で学生指導に関わっている研究者３名で検討した。

3）研究結果

抽出された107データは、28のサブカテゴリーに分類された。サブカテゴリーから最終的に【理解のための観察の重要性】、【個別性・多様性の理解】、【多角的な視点からの理解】、【実際に接して理解することの大切さ】、【相互関係での理解の深まり】、【人として見ることの大切さ】、【家族の重要性】、【対象を取り巻く社会の理解】の８カテゴリーに集約された（表１）。カ

テゴリーを【　】、サブカテゴリーを《　》、コードを『　』で引用した。

4）考　察

観察の重要性については、先行研究でも述べられているが、則包らは実習後のレポートの内容分析から、学生が対象理解をどのように行っているかを「知識的理解・感性的理解・体験的理解」の三つの枠組みを用いて分析しており、観察の重要性は「知識的理解」に含めている[3]。本研究では、実際にデータなどの客観的情報からはつかみにくい「心を病んだ人」を理解するためには、表情や言動や生活状況などから注意深く観察することが重要であるとの学生の気づきを大切にし、【理解のための観察の重要性】というカテゴリーとした。

【個別性・多様性の理解】では、症状の多様性を、患者と関わる事で学べていた。そこで、学生は、《個別性の大切さ》に気づき、『判断基準がないからこそその人の価値観や考え方、発達段階や生活背景までをも含めた個人の特性を見極めることの大切さ』を学ぶことが可能となったと考えられる。

そこで、患者と接して【個別性・多様性の理解】が出来たからこそ、その個別性や多様性に対応できる【多角的な視点からの理解】が求められることを学んだと考えられる。遠藤も、このように全体的相対的な視点を持ちながら、患者像が豊かになればなるほど、学生は「カルテ情報でイメージした患者さん」や「問題捜しをする自分の目的のために存在している患者さん」という枠から脱して、健康な部分も、そうでない部分も持った、そうでしかありようのない目の前の患者を理解するようになる[4]と述べているが、本研究でもそれが明らかとなった。

上記の学びを元に、【実際に接して理解することの大切さ】として、14のサブカテゴリーにあるように様々な学びの広がりへと発展している。患者の病気の部分だけではなく健康な部分である《患者の持つ力の発見》が可能となり、《患者の生活のしづらさ》や《日常生活への支障》にまで考えが至るようになっている。また、《患者の言動の意味》を患者の側から考えようとしている。これも、遠藤[4]の見解と一致する。さらに、患者の側から考えた結果《幻聴の背景にあるもの》や《症状隠蔽の現状》や《言語化することの難しさ》などにも思いが及んだと考えられる。ここで、特筆すべきは《患者の体験している感情》を学んだ学生が多いことである。川野も、実習で学生は病気をもつ患者の苦しみは、自分の想像をはるかに越えるものであることに気づき、安易に「患者のことがわかった」などと言えるものではないことが理解でき、病気の体験で苦しんでいる患者心理の奥深さに気づく体験の１つにな

表１　対象の理解

n＝107

カテゴリー	サブカテゴリー	コード例
理解のための観察の重要性 (20)	注意深い観察が重要 (19)	不安を表出できず抱え込んでしまっている患者もいるので、不安を抱え込んでいないか見極める観察力が必要である
		表情や言動をよく観察することが重要で、その患者をよく知らないと変化がわからない
		患者の心の中は見えないが、表情・しぐさ・生活状況そのものから患者の思いを感じ取る「観る」ことが大切である
	客観的で冷静な把握 (1)	症状がデータでわかるものではないからこそ、客観的かつ冷静に患者の状態を把握する責任がある
個別性・多様性の理解 (23)	症状の多様性 (4)	同じ統合失調症でも人により症状は異なっている
	個別性の大切さ (1)	個別性の大切さについて考えた
	個人の特性を見極めること (18)	基準がないからこそ、患者個人の特性が大切になってくる
		個々の患者によって異なるため、それぞれの患者の傾向や状態を把握することが欠かせない
多角的な視点からの理解 (10)	多角的な視点での捉え (10)	一つの情報だけを見るのではなく、多角的な視点で捉え、統合的に患者の状態を考える必要がある
		目の前にある疾患や症状だけでは患者は見えてこないため、色々な方面から多くの視点を持ってみないといけない
相互関係での理解の深まり (2)	変化していく患者と自分 (2)	患者の笑顔で自分も嬉しくなり、患者の変化する経過を見て感じる事が出来た
		意識して関わることで、二週目と一週目では患者の笑顔に違いを感じた
人として見ることの大切さ (4)	一人の人として見る (1)	病気や問題だけを見るのではなく、一人の人間として見ることの大切さを実感した
	一人の生活者として見る (1)	患者を一人の生活者として捉え、生活についての話を知っていく事が大切である
	疾患を抱えた人として見る (1)	精神疾患にばかり目を向けるのではなく、精神疾患を抱えた人間である事を忘れないようにしたい
	その人自身を見る (1)	症状だけでなくその人自身を観ていく姿勢が求められる
家族の重要性 (3)	患者の家族の重要性 (3)	患者の一番の支えは家族である
		家族と患者の両方に対して敬意を持って関わる事が大切である
対象を取り巻く社会の理解 (1)	社会の受け入れ困難の理解 (1)	家族や地域の方の受け入れがどれだけ困難なものかを少し理解できた

カテゴリー	サブカテゴリー	コード例
実際に接して理解することの大切さ (44)	患者の持つ力の発見 (3)	気遣いの出来る患者を知った
		屋外で楽しそうに行事に参加する患者を見てこんなこともできるんだと感じた
	患者の生活のしづらさ (4)	人との距離をうまく保てず、繊細で傷つきやすい
		コミュニケーションの図りにくさが、そのまま生活のしづらさとなっていると学んだ
	日常生活への支障 (4)	精神症状が日常生活にどう影響しているかを見る事が大切である
	患者の言動の意味 (8)	「つらい」「だるい」という身体的な訴えが何を意味しているか考えなくてはいけないと気づいた
		患者の拒否の意味が理解できるようになった
	患者の変化 (2)	患者と接することで日々の変化がわかった
	患者の体験している感情 (13)	精神疾患や症状のために、コミュニケーションが図れないのはどんなに不便で辛いものだろう
		幻聴や妄想自体ではなくそれによる辛さを聴く事が大事である
		強迫行為をやめられない辛さを関わりを通して感じた
	幻聴の背景にあるもの (1)	幻聴には、患者自身が出来ないという思いが反映されているのではないか
	症状隠蔽 の現状 (1)	退院したいために症状を言わない患者がいることを知った
	安心とストレス (1)	患者は入院することで安心とストレスがある
	言語化することの難しさ (1)	患者は自分の辛さや恐怖を言葉として表現することが難しい
	人生の凝縮 (1)	様々な人間模様を見る事ができた
	疾患理解の深まり (2)	接することで統合失調症という疾患についての理解を深めた
	接しないとわからない (2)	実際に患者の様子を見て自分が感じたことをアセスメントして柔軟に考える事が大切である
	患者イメージの変化 (1)	メディアからのマイナスイメージを持っていたが、接することで親切で繊細で感性豊かな人に変わった

る[5]と述べているが、本研究でもその体験がなされていることが明らかとなった。

患者は変化する。それは、相互関係によるものであり、【相互作用での理解の深まり】とした。患者の変化を喜びと出来た学生は、観察者としてではなく看護師としての本当の基本を学べていると考える。このような学生は、教員が特別に助言をしなくても、次に何をしたらいいのかを患者から学んでいくことができるのである。

さらに本研究では、『病気や問題だけを見るのではなく、1人の人間として見ることの大切さを実感した』り『精神疾患を抱えた人間であることを忘れないようにしたい』と【人として見ることの大切さ】の学びができていたことの意味は大きい。そこから、【家族の重要性】や【対象を取り巻く社会の理解】へと繋がり、患者は1人ではなく家族や社会の中で生きている事を関わりの中から気づけたたことは、対象を理解するうえで貴重な学びであると考える。

5）本研究の限界と今後の課題

本研究は、学生の自由記載のレポートから抽出したものであり、「対象の理解」についても、学生が特に印象に残った内容を中心に述べていると考えられるため、今回抽出された「対象の理解」の学びが全てとして判断することには限界がある。今後は、信頼性や妥当性の検討を視野に入れた研究を行うとともに、「対象の理解」だけでなく学生が実習で対象と関わる事で何を学んでいるのかを明らかにしていきたい。

[引用文献]

1）村方多鶴子・太田知子：精神看護学実習におけるコミュニケーション技術を通しての学び－実習終了後のレポートから－，南九州看護研究誌，5(1)，75-81，2007

2）折山早苗：精神看護学実習における学生の「学び」の内容分析と看護過程の有効性，日本看護研究学会雑誌，30(1)，137-144，2007

3）則包和也・白石裕子：精神看護学臨地実習における学生の対象理解の特徴　レポートの内容分析から，日本精神科看護学会誌、45(2)，232-236，2002

4）遠藤淑美：精神疾患患者への看護とはどのようなものか　患者をとらえ直すことから始めよう，看護教育，49(7)，584-587，2008

5）川野雅資：精神看護臨地実習，第1版、医学書院，40-43，2007